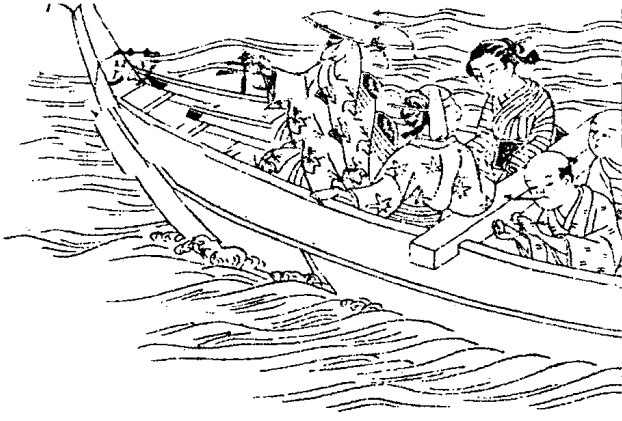
しゃれの文化史

斎藤良輔
著

しゃれの文化史

◎言語遊戯アナリシス◎

斎藤良輔
〔著〕



未來社

斎藤　良輔（さいとう・りょうすけ）
1911年群馬県生まれ。早稲田大学文学部卒。朝日新聞社客員。日本エッセイスト・クラブ会員。玩具評論家。

●著者

『おもちゃと玩具』『増補・日本の郷土玩具』『しゃれ・ことば』『しゃれの世相学』（未来社），『郷土玩具』（三彩社），『おもちゃと人間』（雪華社），『日本人形玩具辞典』『郷土玩具辞典』（東京堂出版），『日本のおもちゃ』（岩崎美術社），『ひな人形』（法政大学出版局），『おもちゃの話』『日本のおもちゃ遊び』（朝日新聞社），『すまいとおもちゃ』『昭和玩具文化史』（住宅新報社）など。

しゃれの文化史――言語遊戯アナリシス――
発行――一九八九年八月一〇日　第一刷発行
定価――二〇六〇円
（本体二〇〇〇円・税六〇円）

著者©――斎藤良輔
発行者――小箕俊介
発行所――株式会社　未來社
東京都文京区小石川三-七-二
振替（東京）七―八七三八五
電話・(03)―814―5521～4

本文印刷――ひろせ印刷
装本印刷――東銀座印刷
装幀――岸顯樹郎
製本――五十嵐製本

しゃれの文化史

——言語遊戯アナリシス——

目次

二つの「しゃれ」の時代　7
第一章　「しゃれ」文化の開花　8
「おしゃれ」と「しゃれ」　9
江戸のダンディズム　16
いろいろな「しゃれ」　24
鬼平の「しゃれ」から　30
第二章　「しゃれ」文化の再開花　41
「文明開花」とその後　41
昭和・戦後調のしゃれ　51
おしゃれ語ブーム　60
ファッショナブル・ジョーク　71
しゃれ・ことば分析　79
大田直次郎のしゃれ　91
ノミ（蚤＝飲）の歌　92
直次郎――その文人録　102

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

狂歌時代の周辺　108
筆禍事件　116
蜀山人伝説　127
二足のワラジの悲哀　136

アリンス国のしゃれ文化　149
しゃれ・あそびの基地　150
「地女」のこと　158
くるわ・がよい　168
くるわ・ことば　177

日本語のなかの「しゃれ・ことば」　189
社楽斎先生のこと　190
「サラダ記念日」先生のこと　199

あとがき　210

装幀——岸顯樹郎

しゃれの文化史

——言語遊戯アナリシス——

二つの「しゃれ」の時代

第一章　「しゃれ」文化の開花

おしゃれ（御洒落）「お」は接頭語

みなりや化粧などを、洗練された、気のきいたものにしようと心を配ることやそのさま。またその人。おめかし。おしゃらく。

おしゃらく＝身なりを飾りたてること。またその人。

しゃれ（洒落）「洒落」は当て字

(1)当世風でいきなこと。気のきいていること。さっぱりしてものにこだわらないこと。洒脱。

(2)はなやかによそおうこと。またははでな服装。いきな身なり。おしゃれ。

(3)その場に興を添えるために言う滑稽な文句。ある文句をもじって言う地口。だじゃれ。警句。冗談。

(4)たわむれてする事。冗談事。遊び。

(5)（得意になれるような）見ばえのよい物事。「浮雲」（二葉亭四迷）「親から仕送りなどといふ洒落（シャレ）はないから、無駄遣ひとては一銭もならず」

〔日本国語大辞典〕（小学館）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「おしゃれ」と「しゃれ」

昭和最終の六十年代から、「おしゃれ」とか「しゃれ」とかいう風俗語が、とくに目立って多くつかわれているとは感じませんか。その傾向は平成時代にも流れ継がれているようです。

新聞、雑誌の記事、タイトル、広告のコピー文、さては「おしゃれしてみませんか」調の呼びかけを連発するこのごろのテレビのCMことば――その他です。

「おしゃれ」と「しゃれ」とは、原義的には同根から生まれた日本語でしょうが、しかもそれぞれがほとんど同時代からつかわれ、流行してまいりました〝ぎょうだい・ことば〟とでも申しましょうか。ニュアンスのちがいはありますが、生活言語としましては、どちらもあそび・ことばの一種であることも共通しております。

ところが、ちかごろのように〝あそび社会〟が拡大繁盛してきますと、「おしゃれ」も「しゃれ」も、もとの意味から越境？　し、混交してつかわれてきたりして、どうもたがいの言語としての区分がはっきりしなくなった傾向がでてきました。

これは日本語の乱れなどと論じるまでもなく、日本語そのものが、あいまいなことば・づかいの体質をもっているからでしょう。

ともかく「おしゃれ」と「しゃれ」は、どこが、どうちがうのかという声が、マスコミ関係の投

書などにもよく見うけられます。

それについて、これまでの解釈では、「おしゃれ」ということばは、「しゃれ」にていねい語の「お」をつけたもの。語音がいかにも女性的で、語意も英語のメーキャップ（化粧）に相当しましょうか。それが化粧を中心に、髪かたちから、容姿、服装、さらにそうしたスタイルでの行動、感覚、着想、美意識、構成力といったものまで含めるようになりました。

「おしゃれ」が流行ブームになりましたのは、ファッショナブル時代を迎えた昭和六十年代の現象ということでしょう。「おしゃれ」ということばが、いつかその意味を拡大変化した時代でもあるわけです。その傾向と実例を、後半の部分でたどってみたいとおもいます。

また「しゃれ」のほうは、軽妙なことばの言い回しで明るい笑いの会話を構成する、いわば「ことばのおしゃれ」あそびとでもいいましょうか。それが現代では「しゃれたマンション」とか「しゃれたメニュー」とか、むしろセンスやアイデアの面が重要視されてきています。江戸のむかしなら「オツな住いじゃねえか」とか「アジな食いものだ」なんて別な表現をしたことでしょう。江戸ことばで〝イキ（粋）〟に通じるのが「しゃれ」ことばでもあるわけです。

ともかく、これら二つの日本語が、ふだんの生活会話にもしきりとつかわれ、流行した時代が過去にもありました。

徳川幕府二百六十五年間の治政下で、慶長八年（一六〇三）の開府から、約一世紀半も経ちました寛保・宝暦（一七四一～六四）ころになりますと、もともと諸国から移住してきました人たちによって合

成されました植民地的大城下町の江戸にも、江戸の町独特のことば・づかいがだんだんと完成されてまいりました。

その「江戸ことば」の核のひとつともなって生まれ発達してきましたのが、また「おしゃれ」とか「しゃれ」とかいうことばでした。

だいたい宝暦年間（一七五一～六四）ころから、明和、安永、天明、寛政、享和、文化、文政と年号がつづく七、八十年間が、この「おしゃれ」と「しゃれ」という二つのことばの最初の流行期ということができましょう。

江戸ことばとして、それに組み入れられ使用されてきたわけで、昭和戦後、このところ「江戸学」として近世史にレトロ調で浮上してきました江戸後期時代に相当いたします。

まず「おしゃれ」ということばがはやりだすためには、やはりそうした風俗語を生みだす母親役の時代背景が考えられます。

ながいこと戦争のない世の中がつづいていました宝暦以後は、金回りのよい町人たちの天下がめぐってきまして、日々の暮らしも諸事派手になってまいりました。（どうやら二十世紀末近い現代の社会現象によく似ていますね）

そんなわけで歌舞伎狂言は千両役者が出現するほどの大人気。ことに美貌の女形などは女性のアイドルになって舞台で用いた衣裳の色合いに似せた着物とか、帯の結び方やら化粧法までが一般家庭の娘たちの間にまで熱狂的に流行してきました。

女性のおしゃれが目立ってきましたのは、宝暦から六十年ほどさかのぼった元禄のころからで、櫛などはこれまで髪をとかすたんなる化粧道具でしたものが、女の髪飾りに昇格して金銀粉を梨子地に塗ったきらびやかな蒔絵あしらいのものとか、海亀の玳瑁の甲を薄く貼り合わせたべっ甲櫛などが出現します。おしゃれは、まず「髪」からというわけです。

明治のころ、そのべっ甲櫛をめぐるしゃれ・ことばが、軽口ばなしでもつかわれました。

「ベッコウ（結構）なお櫛ですネ」

「なにしろあなた、玳瑁（大枚）五円もしました」

女性の会話としては、めずらしく、しゃれのやりとりになっていますが、江戸時代名ごりの日本髪がまだ多かった時代を思わせます。

この玳瑁の櫛は、江戸元禄以後には高価なもので一枚五両（約三〇万円以上）もしたといいます。あるいは、この記録をもとにしたしゃれかもしれません。もう一つ、櫛のしゃれ・ことばといえば、東京・上野池之端にむかしから「十三屋」という櫛屋さんがあります。この屋号は九と四（クシ）で十三になる勘定から生まれたしゃれですね。やはり女性が大好きな焼きイモ屋の看板に、むかし「十三里半」と書いてありましたが、これも栗（九里）より（四里）うまいという同じアイデアのしゃれでした。

足袋も、女性のおしゃれから発明されたという説があります。そのころ旅をするには、草鞋や草履をはかねばなりませんでした。男なら素足ではくこともあったでしょうが、柔かな女の皮膚では

たまりません。そこで「旅には足袋」と、しゃれめいた女の風俗ことばがひとつふえました。

「白粉を塗ること女の定れる法にして、色どり飾るためばかりにあらず」など、元禄年間の『女重宝記』は、「おしゃれ」は、女の身だしなみのため、との建前論をのべています。しかし江戸の女性たちにとっては「女と生れては一日も白粉を塗らず素顔にあるべからず」の本音のほうに、それこそ〝しゃれ〟ではなく本気に取組み実行する時代を迎えたわけです。化粧は「おつくり」ともいいました。天明年間の戯作本に「流しに下り、ぬかにて手を洗ひ、やう〳〵今おつくりが出来たといふすがたにている」描写も登場します。

服装や化粧に心をつかい、気のきいた美しさに「つくり」あげるのが「おしゃれ」ということですが、江戸では「おしゃらく」ともいいました。お洒落を漢字音読みしたものでしょうが、文化七年(一八一〇)刊の滑稽本『浮世風呂』にも、六十歳の老婆とりがやはり女年寄り相手に「なんでもこちとらは(わたしらは)貧弱(心配)しねえのさ。黒油(白髪かくしの髪油)でもなすつて、最う一ぺんおしやらく(おしゃれ)をする気だものを。嫁に行口があらばおばさん、仲人して呉んなよ。鬼も六十、今が婆盛りだ」と、「鬼も十六、番茶も出ばな」をもじって、こんなしゃれをとばしています。

おしゃれといえば、髪を結う新しい職業の女髪結が江戸に出現しましたのは安永年間(山東京山『蜘蛛の糸巻』)で、それが寛政ころから広くはやりだしました。当時の洒落本(『当世気とり草』)に「近年女かみゆひ行れてより、或は月極め、あるひはふり(臨時)」でおしゃれ髪を結ってもらい、一般

家庭の妻女の丸髷をはじめ、さまざまな髪型が登場して、つぎつぎに流行しました。日本髪のおしゃれなこれらのヘア・スタイルを玩具化した紙製の江戸姉さま人形も生まれました。

嘉永六年(一八五三)刊の考証随筆『守貞漫稿』(喜田川守貞)に、「これらの江戸姉さまは、街頭で売っているものは必ずうしろ向きに並べてある」という意味のことを記しております。髪型の美しさを強調するためだったのでしょう。三つ輪、天神髷、文金高島田におさふね……など、約四十種の髪型が、現在も江戸姉さまとして残されております。

おしゃれ着のほうも同様に、不倫の果てに殺傷事件をひき起こした材木商の娘、白子屋お熊(城木屋お駒)が死の刑場に引かれてゆくとき、娘たちの間で人気のありました八丈島産の絹織物、黄八丈の小袖を着ておりましたのが歌舞伎狂言(「恋娘昔八丈」)にもなって評判になったりしました。

女たちばかりではありません。江戸八百八町の治安を守る南北両町奉行所づきの定廻り同心なども、なかなかの「しゃれ者」でした。現在なら警視庁所属の警官の役職です。八丁堀役人の呼び名で、捕物帳小説や髷物ドラマでおなじみですが、これが風采にはちょっとうるさい「おしゃれ」役人でした。

まず、毎朝担区区域の市中警邏に出かける前には、廻り髪結に小粋な小銀杏という髷に結い直させ、月代などもきれいに剃らせます。まるで、ぜいたく三昧のお妾さんなみの日髪日剃というおめかしぶりでした(村上元三『江戸雑記帳』中央公論社)。制服? はといえば、おしゃれ娘のお駒さんと同じ黄八丈に、黒羽二重の紋付羽織、紺足袋に裏金付きの雪駄ばき、という出でたちでご出勤です。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com